
Re:メール。

宇佐美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re:メール。

【ZPDF】

Z0858A

【作者名】

宇佐美

【あらすじ】

一件のメールから始まった恋。双子に恋してた秦。本当に好きなのは憧れだった兄・朔真かメル友だった弟・眞澄か?こうしてる間にも時間は無くなつてゆく…。メールでの出会いを描いたほんのりラブストーリー

Re：はじめてまして掲示板見ました。

こーゆーの初めてなんですけど…よかつたら友達になつてくれませんか？このメールが秦の携帯に受信したのは、月が輝く真夜中だった。

「朔眞あ～起きろつて！」

「…うう、くあ～つうふ。はよ」

外に出ると青い空と赤い頬が目に飛び込んでくる。

「朔眞…顔！」

「ああ、コレ？」

朔眞と呼ばれる青年の右頬はちょっとぴり赤かった。

頬をさすりながらもう一人の青年に答える。

「昨日3番目に別れ話をしたら叩かれた」

「そのうち刺されるんじゃないかな？」

「そしたら眞澄に替え玉になつてもううから」

「なんだよ。それ！」

「心配すんなつて、ウソだから」

朔眞と呼ばれる青年は、眞澄の双子の兄でだいぶ女グセが悪い。

対して弟の眞澄は、一度も女の子と付き合つた事がない平凡な人生を歩んできた。

顔も声も育つた環境も同じなのに、どうしたらいつも性格が違つてしまつたのか。

「ウイツス！双子」

「彩おはよー」

「あれ！？さく（朔眞）、そのほっぺ…またあ？懲りないねえ」

「つるせー。ブス」

「あ、～ムカつく～なんでこんなんがモテんの？」

「さあな。俺先行くから」

後に残された眞澄と彩は朔眞について議論する。

といつても、最初彩が一方的に話して、眞澄は黙つて聞いていただけだが。

「まー（眞澄）の方が優しいからモテそうだけね」

「俺より朔眞は人の好き嫌いがないし…天性の女好き。だし」

「みんなもあんな奴のどこがいいんだか」

「…それは彩もだろ？」

「…？」

「気づいてないと思ってた？ いつから幼なじみやつてつと思つてんのさ」

「あ、アハ、アハハ」

「頑張んないとマジで他の誰かに盗られるよ」

「分かってるよ…分かってるけど…」

「まつ彩なりにがんばんなよ」

「うん。ありがと」

「…」それで、いいんだよなあ～

そう呟きながら外をボーッと眺める。

「眞澄何がいいんだ？」

今が数学の授業中だという事を忘れて、自分の世界に入ってしまった。

おかげで、一人だけ課題プリント10枚やつてくる事になった。右隣の席の朔眞を見ると、『バーカ』と声に出でず口にした。

ヒタヒタヒタジャボンパシャンパシャンッ

「気持ちいい」

今日は休みなのだけれど、水泳部の眞澄は気晴らしに泳ぎにきた。

「ハーアー薄々気づいてたけど…やっぱ失恋かあ」

小1時間泳いでプールから上がった時に携帯には一件のEメールが届いていた。

Re:メールありがとうございます。あたしどうしています。

あたしの方こそよろしくネ（^ ^）つていつか…名前書いてなかつたから教え下さい Re・Re・あつー!「めんなさい。

名前忘れてましたた（笑）俺眞澄。

ところで、歳聞いていいですか? Re・Re・Re・眞澄君ね。いい名前だね～つて、いきなり歳?失礼だなあ～（ 、 、 ）あたし17。

眞澄君は? Re・眞澄、でいいですよ。

17?俺も!なんだ~タメだつたんだRe・Re・ほんとに!/?アツ!「めん（ - - - ）これから部活だから、またねえ 課題を前に頭を抱え、部屋で一人

「ジン」

について考える。

「部活つて何やつてんだろう?」

「誰が?」

「！」

すぐ後ろには兄の朔眞が、今帰つて来たのだろう制服姿のままで立つている。

「なつ、なんでもない」

「?」

ガサガサツ朔眞はノート一冊分の白い紙袋に手を突つ込み、中を漁る。

「何?ソレ」

「隣のクラスの女子に貰つた」

「んで、どーすんの?」

「どーするつて?」

「イヤ、だから…付き合つとかさつ」

「あ～ムリ。美人だつたけど…今時手作りクッキーつて、どーよ?」
そつ言うと漁つていた紙袋から手作りクッキーであろう物を取り出した。

クッキーは透明な袋に数個入つていて、青いリボンで飾つてあつた。

その中に入っていた手紙を読みながら、朔眞は寝てしまった。

眞澄は未だに机に向かっている。

デジタル時計は11時15分を表示していたが、ジンにメールを送りたくなった。

夜遅いので、しようか、しまいか悩んだが結局送った。

Re:夜遅くにごめん。

あのわ…やっぱ女の子って、手作りクッキーを好きな人に食べてもらうつて、嬉しいのかな？あと、なんでメル友作ろうと思ったの？返信メールが帰ってきたのは、次の日のお昼だった。～～

～～～

「あれ？眞澄のケータイじゃね？」

つい最近登録したジンの着信音には、まだ慣れない。

Re:Re:はよ～返事遅くなつてごめんネ（：ーー）うーん…嬉しいよ。

絶対！メル友はねえ～なんとなく、かな。

まわりの子とかも、そんなもんぢやない？Re:Re:Re:はよ～～～今まで一度も貰つた事ないから（涙）貰つてみたいな～俺は幼なじみ以外あんま女の子と話した事ないんだ。

これじゃダメだなつて思つて、女の子とメールしてみようと思つたのが理由なんだけど…Re:えつ！じやあ今まで付き合つたりとかないの？Re:Re:うん（涙）しかも…昨日失恋決定したんだ。

Re:Re:Re:今日失恋しちゃつたRe:Re:Re:Re:なんか、ごめん。

Re:うつぶ。

大丈夫！もしかしたら、そんなに好きじやなかつたのかも（@_@）つて、前向きに考えればけっこ一平氣（^o^）

お互いの失恋話で打ち解けられたのか、それからほほ毎日メールをするようになった。

Re・おはよ

昨日の音楽番組見た?

Re・Re・おはよ

見た見た! 大塚愛ちゃん可愛かった

好きなテレビの話、よく聞くのだったりする。

Re・Re・

映画? 観ないな。

特にアクション映画とか。

Re・Re・Re・

あたしはアクション映画とかすつい好き

Re・Re・Re・Re・

オススメとかは？

Re :

オススメ？うん…今週公開のアクション映画は観たいなっては思つてた(^_ ^)

内容は何でもよかったです。

互いを知りうると情報を貪るようにメールのやり取りを繰り返す。

Re : Re :

部活？チア部 真澄は？帰宅部っぽい(笑)

Re : Re : Re :

チア部！かつこいい！スゴイ！帰宅部？一応俺水泳部なんだ。

Re : 水泳部！？意外！夏はサイコーじゃない？(^_ ^) v

Re : Re : 意外かな？バリバリ運動部だから。

うん。夏はすっげー気持ち良い！Re : いいなあ(^_ ^) Re :

Re : チア部ならさ。背高いの？Re : 禁句用語！背の話は禁句用語だよ！チア部ん中では小さい方で、166cm(^_ ^) 真澄は？Re : Re : 禁句用語？それくらいあれば十分だと思うんだけど…俺175cm。

「なんか最近元気なんじゃん?」

「そーかなあ~」

「なんかあつた?」

「あ~う~…最近女の子とメールしてるんだ。その実は…すう、好き、なんだ」

眞澄は照れ笑いしながら頭を搔く。

その横で同じ顔が豆鉄砲を喰らった鳩のよつに呆気にとられていた。
「…眞澄が!? 彩以外の女と話した事ない眞澄が!?.生まれてこのかた彼女がいない眞澄が!?.」

「悪かったな。俺みたいなので」

眞澄は部屋で雑誌を読みながら話を聞いていた朔眞に向かって、ふてくされた。

それを見てすぐさま朔眞はフォローを入れる。

「イヤイヤ、別に悪くゅつてんじやなくてさ~…ちょっと驚いた…

眞澄なら応援してやるよ」

たとえ女グセが悪くても、兄弟思いの優しい奴だつて事は眞澄がよく知つてゐる。

だから、朔眞に作り笑いさせている、顔だけで寄つてくる女の子達は決して好きにはなれなかつた。

本人も周りが顔だけで寄つてきてるのは、よく分かつてゐるはずなのに不特定多数の女の子と遊ぶ。

その理由が眞澄には分からなかつた。

ジンとのメールを始めてから1ヶ月が経とつとしている。

季節は既に夏が終わるうとしていた。

この日も眞澄は部活で泳いだ帰りだつた。

真夏に比べて陽が落ちるのが早くなつたので、公園を通り过道をする。

すると、どこからか助けを求める声がした。

声の出所を見つけようと眞澄は辺りをグルリと見回す。

「…」

キヨロキヨロ

「…ヤダ！放して！痛い！」

「つるさいんだよ！いいだろ？付き合つてくれよ」
男は、懇願する彼女の長い黒髪を力強く掴んでいた。
ドキドキドキ心臓の鼓動がつるさい。

「はなう、んせよ」

普段の自分の弱さを押し隠して、助けに飛び出す。
あまりの緊張に口がついてこれずに噛んでしまう。
その眞澄の顔を苦しげな表情で見た彼女は、一瞬とても悲しげな表情に変えた。

「誰だ？」

「いーから放せよー！3年…推薦とか取り消されちゃうんじゃないですか？先輩」

眞澄は左襟首のバッジに

「3B」

と表記されているのを見逃さなかつた。

「クッ…」

ドサツ男は今更バッジを隠しながら、そそくさと退散していった。
心音がまだうるさい。

ドキドキドキ本当は耳の中に心臓があるんじゃないかな？と思つてしまふ。

彼女はその場に座り込んでしまつていて、力が抜けたようだ。

「大丈夫、ですか？」

「…怖いかな？」

この問い合わせ彼女は小さく一度頭を動かす。眞澄は手を引っ込めると後ろを振り返る。

「ゆっくりでいいから立つて、送るよ」

今男の人に触られるのは怖いが、漠然と不安が彼女を襲う。

「…」

後ろを向いたままの眞澄の上着の裾を彼女はギュッと握る。その感触が伝わってくるのを確かめて歩き出す。

「」ひちでいい？」

しばらく歩くと彼女の方から口を開いた。

「あの…家そこだから」

「大丈夫？」

「ありがとう」

「お礼なんていーよ」

裾から彼女の手がゆっくり離れて、玄関を開けて家中に入つて行く。

それを見届けてから家路につこうと、来た道を少し戻りうつ振り返る。

「うわっ…ビーして？」

「そんな驚くなよ…傷つくなあ」

まだまだ蒸し暑さを感じるのに汗をかいてない顔をした朝眞が立つていた。

「今日は一人？」

「ああ。今眞澄といったのつて…」

「知つてんの？」

「知つてるも何も俺にホラ手作りクッキーの」

「あれ？」

「ああ。どーゆー知り合い？」

「いや…大した知り合いでいやないんだけど…」

「そつ。じゃ帰るだろ？」

一度だけ彼女が消えて行つたの方を振り返る。

その次の日に腰を抜かすほど、驚く出来事が眞澄を待ちかまえていた。

それは一人の訪問者によつて訪れる。キヨロキヨロ

「誰か探してんの？」

「あつ…え…と、」

窓際の席に友人と話している眞澄の方を見て、指さす。

「あの人呼んでもらつていい？」

「えつ！眞澄の方？朔眞の方じゃなくて？」

「…眞澄つてゆーんだ」

「眞澄が弟で、あっちの朔眞は兄貴」

「…間違いなく眞澄の方」

「そつ。オーイ眞澄い！」

「ん~？」

「呼んでつぞ」

「女の子」

一瞬クラス中がどよめいた。

女から呼ばれるのはいつも決まって兄・朔眞の方だから、弟の眞澄が兄を差し置いて呼ばれるなんて事は重大事件としか言いようがない。

「あ、ーおそれていたことがついに！」

「なんだよ、それ？」

「ついに眞澄が朔眞の代わりにぶたれる口がやつてきたんだ！」

「オイおい、冗談は顔だけにしつけって。俺がいつ女にぶたれたつ

て

『…』白々しいものである。

最近女にぶたれて頬に傷を作ってきたのは、皆様ご承知の通り

「朔眞」

。眞澄を呼んだのは昨日襲われていたのを助けた彼女だった。

「あれ？昨日の…どーしたの？また何かされた？」

「ううん。違うの、もう一度お礼がいいたくて…ありがとう」

「ほんとお礼なんていーつて。よく俺が2Eだつて分かったね

「バッヂ見たの。あたし新アラタ秦シン眞澄、君だよね？」

「…ジン？もしかして…チア部の？」

「うん…やっぱり眞澄、君？実際名前呼ぶなんて慣れないや

「いーよ。眞澄で」

「双子なんて知らなかつたから驚いちゃつた」

「兄貴の朔眞で俺弟」

「朔眞君の事は知つてたんだ…」

秦からお礼に貰つた手作りクッキーを音を立てて貪り食う。ボリッ

ボリボリッ

「眞澄…うつせー」

「…」

ボリボリボリッ彼女は秦＝ジンだつた。

しかも、兄の朔眞に告白していとは知らなかつた。

それを知つて悔しいような言い表せない気持ちになつて落ち込む。夜になつて秦からメールが一件届いた。

Re : クッキー食べてくれた？ 今日はビックリ！ したけど… 今度改めて一人で会わない？ 実は映画のチケット持つてゐの(^ ^) Re

e : Re : クッキーありがとう。

おいしいよ！ 映画？ 悪いけど… Re : Re : Re : なんで？ (、) あたしが朔眞君に告白してた事気にしてるの？ Re : いや… そんなんじゃないけど。

Re : Re : ジャ決定ネ 明日駅前に10時ね！ 遅刻しないでね 待つててるから どうやら映画に行く事は決まつてしまつたらしい。

「…どーしょ…朔眞…」

「どーした？」

一段ベットの上段からヒヨイと顔を出す。

「俺の代わりに映画行ってくれ…！」

「はあ？ なんで？ 真澄いきやあいじやん」

「無理ムリムリ！ そんな事した経験ないからどーしたらいいか分かんない。それに応援してくれるつて、言つたじやん…」

「まあ、言つたけど…」

一方は泣き出しそうな情けない顔、もう一方はそれを見て困つた顔をしている。

朔眞はベットから降りて、眞澄の頭をペチッと叩く。

「今度なんかお「これよ

「さくー」

「あ、～俺と同じ顔で情けない面すんな！」

トントントンツガチャツ

「入るよ～」

ノックをして入ってきたのは、幼なじみの彩。

「…何してんのさ？」

情けない顔をしてる眞澄の肩に手をかける朔眞達を見て、彩の動きが止まつた。『イヤ…別に』

「それよりさ～一緒に映画行かない？」

「俺バス！」

「エツー！まーは？」

「俺もバス、かなつ」

「この映画明日までなのに…」

「彩ごめん」

「誰か他の奴と行けばいいじゃん」

「…」

「あつ！一緒に行く男なんていないかっ」

それを聞いて眞澄はヤバイと思って、彩を見る。

彩は握り拳をフルフルと振るわせて今にも襲いかかりそうだ。

「さくのバカ！大つ嫌い！」

豪快な足音をたてて部屋を出していく。

「あつ彩！オイッ…あんな事ゆつていいのか？」

「いーんだよ」

午前10時5分前、既に駅には秦が来ていた。

黒のフリル付きミニスカートに、飾り気のない白いベアトップの上に青い半袖を羽織つていてる。

可愛さの中にどこかスポーティーな感じが秦の本当の美しさを際だたせていた。つまりは、可愛い。

「はよ

「おはよ」

秦は控えめだけれど手を振る。

「何の映画見るの?..」

「…えつああ、『』」

出されたチケットは、昨夜彩が観に行こうと持つてきただと同じだつた。

「田曜だからナツヒー混んでるね」

「そうだな~今日最終日だし」

「あつち空いてるよ」

その一人の姿を田で追う影が一つ。

「…誰あれ?」

「ふつーなんとか無事に…」

『ん?』 それぞれの声の方を見やる。『あ、ーーー..』 しばしの沈黙。

「まー? なんでここに?..」

「あつ、んつ、イヤッ…なつ」

うまく誤魔化し切れずに口がどもる。

「さくと一緒にいた人誰?..」

「…ピコシピコ~~」

うまく答えられないで、仕舞には下手な口笛を吹いてしまつた。それに業を煮やして彩は眞澄を連れてシアターホールの中に入った。「この映画眞澄と一緒に観れるみたいで、よかつた」

「何でこの映画?..」

「…眞澄アクション映画好きだつて言つてたから、これにしたんだけど」

「ああ~うんうんアクション好き」

眞澄そんな事言つてたっけかな? 映画あんま観ないつて、言つてたよつな…ビヤー――

「…始まるよ」

アクション映画が始まり、彩と眞澄コンビは秦と朔眞達から少し離れて座る。

「う、さくの隣に座りたかったのは、あたしなのにいへ」「ごめん…俺のせいだ」「何でまーが謝るの?」「実は…」眞澄は彩に秦の事、自分の代わりに朔眞に秦と「テートしてもうつている事を順を追つて説明した。

「…何それっ!」

「シツー」

本当の事を知つて、上映中にも関わらず勢い余つて椅子から立ち上がる。

「あわあつ!」「めん」「何それっ!まーの意氣地なし。そこまで弱虫だとは思わなかつた」「ハツ、本当にうだよな」眞澄が見つめる先には朔眞の隣の秦の後ろ姿。

「イイネーあの俳優好きなんだよね~」「…そつなんだ~ねえ、コラ飲む?」「ああ、ありがと」映画に大興奮の中、眞澄のフリをした朔眞はコーラを受け取つて一口一口飲んだ。

「ゴクゴクッ」「おいしー?…朔眞君」「ああ、うん…さ…って…」「気づいてないと思ったの?最初からずっと気づいてたよ」「そりや困つたな」ペコちゃんのように、ペロリと舌を覗かせた。

「だつて、眞澄はこーゆー映画観た事ないって言つてたし、話し方の印象が違う!それに運動部だからコーラ飲まないって言つてました」「参りました。

もう何もゆ一事はないです」「それに…」「それに?」秦は一度優しく笑う。

「それにね…どつちが好きな人ぐらいかは、分かってるつもりなんだけど」「コクるの?」「しないよ」「何で?」スクリーンにはエンドロールが流れて、映画が終わつた事を知らせた。

彩と正体がバレた朔眞は眞澄を取る為に映画館を出ようと、入り口に向かつていた。

「ホラ!まー行くよ

「行くのかよ？」

「当たり前でしょー見失つちゃうよ。急いでー」

「何かややこしい事になつてきただなあ…」

「早く早くー」

ファミレスに入ると、窓際の席に通される。

眞澄達からは朔眞の後ろ姿を確認できるが、遠くて一人の会話が聞き取れない。

「何話してるのかなあ…うー楽しそう」

眞澄は秦が自分以外の人と楽しそうに笑つてているのを見て、心が傷んだ。

ギュ～～～胸が押しつぶされてしまいそうで、息ができなくて苦しめた。

「あつーまー一人が出てくよ

「まだ、ついてくの？」

「当たり前！もし告白とかなつたら、どーすんの？」

ファミレスを先に出た二人はどこに行く訳でもなく歩いていた。

「どお一人ついて来てる？」

「ああ…何で彩までくんだよ」

「彩ちゃんには悪い事しちやつたかな？」

「何で？」

「…だつて今日の映画朔眞君誘われたんだよね？」

「それが？」

朔眞は訝しげな顔で秦を見下ろす。

「鈍…それより頼んだ事お願いネ！」

「いつでもいいぜ」

二人は河川敷の遊具の間を抜け、青いブランコに跨る。ガチャツキ

イーキー

「ブランコなんて懐かしく楽しい～ねつ眞澄ー」

一人の後をついて来ていた本物の眞澄は、秦が朔眞を眞澄と呼んだ事に対して騙してるという罪悪感で胸が痛んだ。

そういうじてのうちに秦が本題を切り出した。

「眞澄」

「何?」

「眞澄とメル友になつて毎日が楽しかつたよ。困つてたら助けてくれて家まで送つてくれて嬉しかつた」

「俺も楽しかつた」

「それでね今日会つて、眞澄ならつて思つた…あたしと付き…」「まつ!つて」

思わず本物の眞澄が秦の前に飛び出す。

その瞬間「ラン!」を「ぐ」秦の足が眞澄の顔に見事命中してしまった。ガツン!『あ、――――!』

「ごめん眞澄大丈夫?」

「うんぐつ…今なん、て?もしかして」

「『めんね!眞澄じやなくて朔眞君だつて最初から気づいてたの」顔を押さえてる眞澄の代わりに一緒につけて来た彩が口を開く。

「…じやあ分かつてるなら、どうして?」

「彩おまえ関係ねーだろつ」

「あるよ!」

二人を見て秦は思いつきり笑つた。

朔眞は不思議そうな顔をした、隣の彩は林檎に負けないくらい耳までが真つ赤になる。

「心配しないで彩ちゃん。あたしが朔眞君と楽しそうにしてれば、ヤキモチやつてくれるかなつてふざけてみたの」

「じゃ告白も…」

「もちろん!冗談」

「よかつた」

「だから、何でおまえは…」

顔を押さえたまま放心する眞澄が秦の前に立つ。

「…怒つてる?『ごめ、』」

「『めん!俺意地なしだつた。他の人に、しかも前好きだつた人

にデーター頼むなんてサイデーターだった

眞澄は深々と頭を下げる。

その姿を見て顔を上げてと、秦は優しく声かけた。

「オーラー、空が青い。

飛行機は細長い雲を作つて次第に見えなくなつてく。

「泣いて後悔するなら…」

「う、う、う、わかつてゐよ」

泣いてゐるのは眞澄。その鼻にはふんわりティッシュ。

「怒つてないから顔をあげて。怒つてないけど…」

そこにはいる全員が、何だ?といつ表情に変わる。

「けど?」

「残念だつたな。引つ越し前に眞澄と遊びたかつたんだけど」

絶句。やつと出た言葉は引つ越し先を聞く事。

「引つ越し?どこに?」

「アメリカ。向こうで本格的にチアの勉強しに留学するの」

「アメリカ…いつ?いつ行くの?」

反芻してみても実感が湧かず、アメリカが宇宙の果てに思えた。

「5日後だつてさ」

代わりに事情を聞いた朔眞が答える。

「映画観てる時に聞いた」

「…だから最後に眞澄と会いたかつた…けど、今日は時間がなくなつちゃつたね」

辺り一面太陽の光は消え失せ空には無数の星が煌めいていた。
見送りには行くと約束を交わし別れる。

Re:久しぶり あれから4日が経つて、明日11時の便でアメリカに行きます。

見送りしてくれるよね? Re:Re:行くよ。

笑顔で送り出せればいいけど…朔眞と彩も一緒だから。

Re:Re:Re:ほんと? 来てくれるんだ? ありがと♪(^_-^)

V

「…」

「…」

人々が行き交う空港で別れの言葉を探す一人は沈黙を語る。

「住所分かったら手紙とか書いてな」

「うん」

「チアの勉強頑張れな」

「うん」

「えっと…」

「…」

『11時08分発ニューヨーク行きは…』搭乗が…お願いいたします』別れを告げるアナウンスが空港内に響きわたる。

「行かなきや」

「あつ、ああ」

離陸ゲートへと足をゆっくりと向ける。振り返つたまま話す。

「やつぱり、手紙書かないよ」

「えつ？」

「つらいから…好きなのに会えないなら手紙なんて書かないほうがいいもん」

顔が見えないが眞澄は秦が泣いてるんじゃないかと思った。

「会いに行くよ…今すぐは無理かもしないけど、いつか必ず…」

振り返つた秦の顔が田の前。こりこ

「待つてる」

柔らかい唇が眞澄の唇を奪つていった。

秦の後ろ姿をいつまでもずっと見送る。

立つたままの眞澄の顔を朔眞が後ろからのぞき込む。

「あつ！ハナチ」

「オ————空が青い。」

飛行機は細長い雲を作つて次第に見えなくなつてく。

「泣いて後悔するなら…」

「う、う、う、わかつてゐる」

泣いてるのは眞澄。

自分が大切にしたかつた人はいなくなつた。伝えたい事も伝えられ
ずに…。

「好き」

のたつた一言も口に出せずに…。

「向こうでは気をつけるよ」

「大丈夫だよ。向こうで秦が待つててくれるから
ガチャッ

「いつてきます！」

だから、今度会つたら伝えたい…」の青空の下で。

「秦が好き」
つて。

(後書き)

こんにはーそして、はじめまして 宇佐美です。今回は第3弾目のお話でした。メインをメールでの会話にしたため雑な文章になってしましました(;一;)ごめんなさいネ。次回は兄の朔眞の恋を予定しています。その前に修学旅行の短編も書くやもしれません。最後まで読んでいただけありがとうございます。感想などいただけたら幸いです リクエストも募集中です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0858a/>

Re:メール。

2010年10月10日06時50分発行